

# ***PARTITION***

## **パーティション**

***PARTITION*** は展覧会である

***PARTITION*** は楽譜である

***PARTITION*** は分離で結びつける

***PARTITION*** は未完成な旋律

***PARTITION*** は見るもの、聴くもの

***PARTITION*** は毎日変化する

***PARTITION*** は再び見るもの、複数回聴くもの

出展作家

山角洋平

松延総司

ガブリエ・バロンタン (Valentin Gabelier)

バンジャマン・ラフォール (Benjamin Lafore)

セバスチャン・マルティネス・バラ (Sébastien Martinez Barat)

ゲストキュレーター: オドレー・タイヒマン (Audrey Teichmann)

「パーティション」という言葉はフランス語で、音楽あるいは振り付けを記した紙のことを指す。またそれだけではなく、身体的な空間における分割の体系を表す。今回の「パーティション」展は、造形作家、音楽家、建築家、そしてキュレーターの活動を通じて、この多義的な表題の用い方の可能性を探求する。このテーマの曖昧さは、非=表現的な領域に属するものに形を与えるという試みの集積に含まれる。こうして本展では、山角洋平、松延総司、ガブリエ・バロントン (Valentin Gabelier)、バンジャマン・ラフォール (Benjamin Lafore) とセバスチャン・マルティネス=バラ (Sébastien Martinez-Barat) の仕事を通じて、この両義性についての思索を提示する。

## 音楽

もしあらかじめ、「パーティション」の音楽的な語義を採用するならば、それは時間が経過するとともに捉えることのできない空間の中で展開する、非=物質的なマテリアルの不可能な表現を意味する。こう定義することでそれは必然的に、条文によって定着したものと以降の再現との間に生まれる余白を即座に認める、記憶、再生産、そして解釈のためのある種の編作を意味することとなる。音楽研究者は、西洋で19世紀に現代の形式が定まったこの視覚的な表現方法の歴史については考察してきたが、言語からある体系への変換という問題は残った。楽譜が結晶化するものは極端である。それは作家の不在という条件で、作品を完全に再現することを可能にしなければならない。これが演奏者と楽譜を結びつける契約であり、楽譜は線描によって物語を語る音楽の声である。一連の記号を通じて発露するこの造形的な性質によって、楽譜に描かれたものは演奏家によって再生産される固有のオブジェとなる。「パラダイムのために内在の記号論的な固有の体系を選択することによって、西洋音楽はその独自のフォーマリズムへと自らを投影することとなった。それはこのように、表現の象徴的なプロセスを発展させるために、空間的な見取り図のすべてのアーカイブを使用した<sup>1</sup>。「プロセス」、それは定められた意図に要約されるものとして、あるいは他の作家によって制限された性質に要約されるものとして、除去され、解体され、使用されるための特性である。

## ダンス、パフォーマンス

一連の動作の保存に関する問題意識に含まれる、振り付けのスコアあるいはキネトグラフィーは、「演者の機能の循環を可能にし、解釈の働き、ダンサー、振付師、トランスクリプター、観客といった、これらそれぞれの役割の配置を抑制する」<sup>2</sup>。関係性のインターレースの中で、作品を生むもの、作品を形作るものが思考される。作家性の問題は、多かれ少なかれ停止した、判別可能な、再生産可能な、そして解釈可能な条文によって、再び読み取ることが可能となった体系の中でその核心を見出す。体系それ自体が、単なるアーカイブではなく、フォルムを生み出す。それは、ジャック・グッディーが定義するときの、グラフィカルな理由の性質である。「私たちは文字の無い社会の小説やシンフォニーを想像することはできない。そこに物語やオーケストラがあったとしてもである。つまり、小説やシンフォニーは本質的に書かれた表現である」<sup>3</sup>。この文書は実践によって非=可視化される。運動は新たに、記譜法からそれ自身を演繹し、体の記憶の中に体現される。そして、スコアが伝達する「指示」を忠実に再現する、あるいは逸脱する、すべての可能性を再び作動させる。

## 空間、区分

フランス語において、「パーティション」という語の多義性は、音楽表記法において垂直の線によって表される各拍子の分割から、建築的な空間の区分、データ保管のためのデジタル空間での細別にまでわたる。時間的あるいは空間的な場所の間に位置付けられる、この物質的あるいは非=物質的な境界では、拍子の時間の単位を超える音楽的なフレーズの配置、音の横溢、壁の間に溢れる光といった、透過性についての疑念が生まれる。威圧的な防水壁や劣化することのないデータの体系のみが、明白で効果的な仕切りとして機能する様に感じられる。

1. H. Dufourt, *Musique, pouvoir, écriture*, Christian Bourgois éditeur, coll. Musique/Passé/Présent, Paris, 1991, p. 179

2. I. Launay, « Poétique de la citation en danse. D'un faune (éclats) du Quatuor Albrecht Knust, avant-après 2000 », in I. Launay, Pagès (dir.), *Mémoires et Histoire en danse*, Mobiles N°2, L'Harmattan, Paris, 2010, p. 57

3. J. Goody, *La Raison graphique, La domestication de la pensée sauvage*, Les éditions de Minuit, Paris, 1979, p. 72

## 形式

彫刻、インスタレーション、音、建築、パフォーマンスという領域にわたる各々の実践は、時間、空間、偶然、連続性、断絶、モチーフ、オブジェ、そしてイベントといった視点から「パーティション」という本展の主題を扱うことだろう。この学際的なアプローチ、そして作品の提示は、分割された空間のパーティションについての一連の覚書を作り上げるだろう。それはつまり、この音楽的で建築的な概念の豊かさを、音、形、遊びをひとつの空間に配置する試みである。

### 山角洋平——アーティスト

音と映像の作品を制作する。哲学と映画を学んだ後、ル・マン美術学校を卒業。2012年に音楽レーベル、「レシ」を共同設立する。ル・フレノワ-フランス国立現代美術スタジオに在籍（2017-2019）。同スタジオの企画展「Panorama 20」（2018）では、16mmフィルムで撮影された監督作品《La lyre à jamais illustra le taudis》が上映される。現在は、ウェルギリウスの『牧歌』に着想を得た長編映画作品を準備している。音自体をコンセプトにした作品を多くの展覧会で紹介。彼のそうした作品の中には、音の本質についての文章や映画、あるいは音への関心を高める環境の制作など、音が鳴らないものもある。

### 松延総司——アーティスト

松延総司は、作家活動やインスタレーションを通して、線と影について、「ネガティブな側面」を持つ要素として問いかける。彼は時として、「石」や「デッサン」、「落書き」といった抽象的なコンセプトをモチーフとして用いることで、それらのアイデンティティーを制作・使用することで再考察しようと試みたり、あるいは繰り返したり広めたりする模様にも還元する。そうして、バリエーションを与えながら繰り返し広げ、作曲家がフレーズを扱うようにオブジェを扱う。音楽で「持続」と「静寂」について語るのと同じように、オブジェに関して「静止」や「無」について語る。

### ガブリエ・バロンタン——アーティスト・本展キュレーター

ガブリエ・バロンタン (Valentin Gabelier) の研究は、時間と空間を通じた個人の発露と散逸の指針を生み出す、声とその柔軟で捉えがたい特性についての考察から成り立っている。声は彼の取り組みの中で、身体とその環境、自我と他者の間の通過点、あるいは言語の知的な抽象化と音の具体的な素材の間の不確かな合流点である。インスタレーション、ビデオ作品、パフォーマンスを通じて、ガブリエ・バロンタンは声、言語、そして音を基に彼が取り扱う空間や媒体について問いかける。

声の複雑で両義的な性質も、作品がその作者または/及び演奏者の手を離れる方法についてより広く考察することの出発点である。

### バンジャマン・ラフォールとセバスチャン・マルティネス=バラ——建築家

バンジャマン・ラフォール (Benjamin Lafore) とセバスチャン・マルティネス=バラ (Sébastien Martinez-Barat) は建築家。彼らの実践は構築、リノベーション、オブジェや出版物の構成を結びつける。2016年、フランス文化庁のAlbums des jeunes architectes et paysagistesを受賞。ヴィラ・ノアイで開催される建築展のキュレーションを担当している。2016年のヴィラ九条山での滞在時には、《Miscellaneous Folies》と名付けられた、フォリーについての研究と構築の仕事を開始した。これらの成果は、2019年1月にブリュッセルのKanal-Centre Pompidouにおいて展示される。

### オドレー・タイヒマン——本展ゲストキュレーター

オドレー・タイヒマン (Audrey Teichmann) はジュネーブ (スイス) 在住のインディペンデント・キュレーター。アートセンターや文化機関において、学際的で実験的な手法に重点を置いたキュレーション活動を行っている。国際博物館会議 (ユネスコ) から2度表彰されており、遺産財団や青少年省、欧州連合文化部からの研究助成を受けた。ヴィラ・ノアイの建築部門補佐、ペラポップ・フェスティバルのプログラム責任者、ジュネーブ造形芸術大学の研究ディレクターを務め、アートセンターや現代美術に関する出版物への寄稿も行っている。

会期／2018年12月15日(土)－12月24日(月・振休)

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

〒604-0052 京都市中京区押油小路町238-1

11:00-19:00 ・ 17日(月) 休館 ・ 入場無料

075-253-1509 gallery@kcua.ac.jp

<http://gallery.kcua.ac.jp>

## オープニングイベント

**12月15日(土) 18:30-21:00**

18:30- 展示とイベントのイントロダクション

18:40- 山角洋平の映画『La lyre à jamais illustra le taudis』の上映

19:15- ゲストアーティスト オクターヴ・クルタン (Octave Courtin) によるビュッフェの開宴

19:30- ガブリエ・バロンタンによるパフォーマンス『Voice Extension/Voice Extinction』

20:00- ゲストアーティスト 橋爪皓佐

足立智美「どうしてひっぱたいてくれずに、ひっかくわけ？」

橋爪皓佐「Partition nr. 1」(新作初演)

21:00 終了

※参加無料・申込不要

## クロージングイベント

**12月23日(日) 17:00-19:00**

ゲストアーティスト 小松千倫によるパフォーマンス

山角洋平の映画『La lyre à jamais illustra le taudis』の上映

その他パフォーマンス等。詳細は@KCUAウェブサイト参照

※参加無料・申込不要

主催：京都市立芸術大学

@KCUA  
KYOTO CITY UNIVERSITY OF ARTS ART GALLERY  
京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA【新川園地ギャラリー内】

京都市立芸術大学  
Kyoto City University of Arts

# ***PARTITION***

## **パーティション**

***PARTITION*** est une exposition

***PARTITION*** est une partition

***PARTITION*** rapproche dans la séparation

***PARTITION*** est une mélodie inachevée

***PARTITION*** est à voir et à écouter

***PARTITION*** change chaque jour

***PARTITION*** est à voir encore,  
et à écouter plusieurs fois

**AVEC**

**Yohei Yamakado**

**Soshi Matsunobe**

**Valentin Gabelier**

**Benjamin Lafore**

**Sébastien Martinez-Barat**

**Commissaire invitée : Audrey Teichmann**

Le mot « Partition », en français, désigne la feuille contenant une notation musicale ou chorégraphique, mais aussi le système de partitionnement d'un espace physique. L'exposition « Partition », explore au travers des recherches de plasticiens, musiciens, architectes et commissaires d'exposition, des déclinaisons possibles de son titre polysémique. L'ambiguïté de cette proposition fait partie intégrante des tentatives de mises en formes de ce qui, à de nombreux égards, s'inscrit dans le champ du non-représentable. L'exposition offrira ainsi une réflexion sur cette double signification, au travers des travaux de Yohei Yamakado, Soshi Matsunobe et Valentin Gabelier, Sébastien Martinez-Barat et Benjamin Lafore.

## Musique

Si l'on admet en préliminaire l'acception musicale de la « partition », elle est le rendu impossible d'une matière non matérielle, dont la manifestation, étalée dans le temps, se déploie dans un espace insaisissable. Il s'agit dès lors nécessairement d'une transcription, pour mémoire, reproduction, et interprétation, admettant d'emblée une marge entre une chose fixée par convention et un rendu ultérieur. Si les musicologues se sont penchés sur l'histoire de cette représentation graphique, dont la forme contemporaine a été fixée, en Occident, au 19<sup>e</sup> siècle, reste la question d'une conversion d'un langage en un système. Ce que fige la partition, est poussé à son paroxysme : elle doit permettre de restituer intégralement l'œuvre en l'absence de l'auteur. Contrat liant à l'interprète, elle est la voix intradiégétique de la musique au sein d'une œuvre graphique. Ce caractère plastique manifesté au travers d'un ensemble de signes, fait du dessin de la partition un objet propre à être reproduit par des musiciens : « En prenant pour paradigme son propre système sémiologique de substitution, la musique occidentale s'est trouvée projetée sur la voie de son formalisme propre. Elle a ainsi utilisé toutes les ressources du schématisme spatial pour élaborer ses procédés symboliques d'expression »<sup>1</sup>. « Procédés », propres à être démis, déconstruits, utilisés en tant qu'objets réduits à leur intentionnalité programmatique ou à leur caractère restrictif par tout autre artiste.

## Danse, performance

Inscrite dans la problématique de préservation d'un ensemble gestuel, la partition chorégraphique, ou *cinéto-graphie*, « permet la mise en circulation de la fonction d'auteur, déterritorialise le travail de l'interprétation, ces emplacements respectifs de danseur, chorégraphe, transcripteur, spectateur. Dans l'entrelacs de relations se pense alors ce qui fait œuvre et ce qui la constitue »<sup>2</sup>. La question auctoriale trouve son enjeu au sein d'un système, à nouveau, déchiffrable par convention plus ou moins arrêtée, répertoriée, reproductible, interprétable. Il est lui-même générateur de formes, et non pas simplement d'archives. C'est le propre de *La Raison graphique*, telle qu'élaborée par Jack Goody : « On ne peut pas imaginer de roman ou de symphonie dans une société sans écriture, quoi qu'on puisse y trouver des récits et des orchestres ; roman et symphonie sont des modes d'expression intrinsèquement écrits »<sup>3</sup>. Ce document s'invisibilise par la pratique : le mouvement s'extrait à nouveau du champ de la notation pour s'incarner dans une mémoire du corps, qui réactive toutes les possibilités de fidélité ou d'écart à la « consigne » que transmet la partition.

## Espace, cloisons

La polysémie du terme « partition » en français s'étend du partitionnement de chaque mesure dans la notation musicale, signalée par une barre verticale, au cloisonnement propre à un espace architectural, à la subdivision de l'espace informatique pour le stockage de données. Sur ces frontières matérielles ou immatérielles, placées entre des espaces eux-mêmes temporels ou spatiaux, se maintient le doute d'une possible perméabilité : déploiement de la phrase musicale au-delà de l'unité de temps de la mesure, débordement du son, de la lumière entre les parois. Seule l'autorité d'une paroi étanche ou d'un système incorruptible de fichiers semble agir comme partition franche, *opérante*.

1. H. Dufourt, *Musique, pouvoir, écriture*, Christian Bourgois éditeur, coll. Musique/Passé/Présent, Paris, 1991, p. 179

2. I. Launay, « Poétique de la citation en danse. D'un faune (éclats) du Quatuor Albrecht Knust, avant-après 2000 », in I. Launay, Pagès (dir.), *Mémoires et Histoire en danse*, Mobiles N°2, L'Harmattan, Paris, 2010, p. 57

3. J. Goody, *La Raison graphique, La domestication de la pensée sauvage*, Les éditions de Minuit, Paris, 1979, p. 72

## Formes

Les pratiques propres à chacun – sculpture, installation, son, architecture, performance –, offriront ainsi d'aborder le thème sous les angles du temps, de l'espace, du hasard, de la continuité, de la rupture, du motif, des objets, des événements, etc. Cette approche transdisciplinaire, la présentation des pièces, constitueront un ensemble de notes sur la partition d'un espace segmenté : une tentative de mettre en son, en forme et en jeu de la richesse de cette notion à la fois musicale et architecturale au sein d'un même lieu.

### **Yohei Yamakado, artiste**

Yohei Yamakado est diplômé de l'ESBA, Le Mans, France. Co-fondateur du label de musique expérimentale RÉCIT, membre de Velveljin, il a présenté des travaux autour du concept de son même dans nombreuses expositions. Le son n'y est pas toujours joué, mais engage d'autres informations autour du son, comme des textes ou des films sur son essence, ou la création d'un environnement qui favorise l'attention qui lui est porté.

### **Soshi Matsunobe, artiste**

A travers sa pratique artistique et ses installations, Soshi Matsunobe traite de la question de la ligne et de l'ombre en tant qu'éléments dotés d'un « aspect négatif ». Il use parfois de concepts abstraits tels que la « Pierre », le « Dessin », le « Graffiti » comme motifs, tout en tentant de reconsidérer leur identité par leur réalisation ou leur usage, ou leur réduction à un motif à répéter et répandre. Il traite ainsi des objets comme un compositeur traiterait de phrases musicales, en les répétant et déployant au sein de variations. Au même titre que l'on parle de « durée » et de « silence » en musique, l'on peut parler de « stase » ou de « néant » au travers des objets.

### **Valentin Gabelier, artiste et commissaire de cette exposition**

Le travail de recherche de Valentin Gabelier se développe à partir d'une réflexion sur la voix et son caractère malléable et insaisissable qui en font un vecteur d'éclatement et de dispersion de l'individu à travers le temps et l'espace. La voix est dans son travail un lieu de passage entre le corps et son environnement, entre le soi et l'altérité, ou encore un lieu de croisement instable entre l'abstraction intellectuelle du langage et la matière concrète du sonore. À travers l'installation, la vidéo et la performance, il s'appuie sur la voix, le langage et le sonore pour interroger les espaces et les médiums qu'il manipule. La nature multiple et ambivalente de la voix est également à l'origine d'une réflexion plus large sur les moyens d'émancipation de l'œuvre face à son auteur et/ou son performeur.

### **Benjamin Lafore et Sébastien Martinez-Barat, architectes**

Benjamin Lafore et Sébastien Martinez-Barat sont architectes, leur pratique regroupe constructions, rénovations, conception d'objets et publications. En 2016, ils sont lauréats des Albums des jeunes architectes et paysagistes décernés par le Ministère de la Culture. Ils sont commissaires des expositions d'architecture de la villa Noailles, Hyères. Ils ont inauguré un travail de recherche et de constructions de folies intitulé « Miscellanéous Folies » lors de leur résidence à la villa Kujoyama à Kyoto en 2016, qui donnera lieu à une exposition en janvier 2019 au Kanal-Centre Pompidou de Bruxelles.

### **Audrey Teichmann, commissaire d'exposition invitée**

Audrey Teichmann est une commissaire d'exposition indépendante basée à Genève (Suisse). Sa pratique curatoriale, menée auprès de centres d'art et institutions, s'attache à la transdisciplinarité et à l'expérimentation. Ses travaux ont reçu deux prix de l'International Council of Museums (Unesco), et des bourses de recherche de la Fondation du Patrimoine, du Ministère de la Jeunesse et du département Culture de l'Union Européenne. Attachée à la section architecture de la Villa Noailles, responsable de la programmation du festival Baleapop, elle est directrice de recherche pour la Haute École d'Art et de Design de Genève, et écrit pour des centres d'art et publications en art contemporain.

# EXPOSITION DU 15 AU 24 DÉCEMBRE 2018

Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA

238-1 Oshiaburanokoji-cho, Nakagyo-ku, Kyoto 604-0052 JAPAN

11h – 19h, fermé le 17 décembre, entrée libre

+81-75-253-1509 gallery@kcua.ac.jp

<http://gallery.kcua.ac.jp>

## VERNISSAGE

### 15 décembre 2018, 18h30 – 21h

18h30– Présentation de l'exposition

18h40– Projection du film de Yohei Yamakado *La lyre à jamais illustra le taudis*

19h15– Ouverture du buffet par Octave Courtin, artiste invité

19h30– *Voice Extension/Voice Extinction*, performance sonore de Valentin Gabelier

20h– Performance de Kosuke Hashizume, compositeur et musicien invité :

*Why you scratch me, not slap?*, Tomomi Adachi

*Partition nr. I*, Kosuke Hashizume (première publique, pièce écrite pour l'exposition)

21h Fermeture

## FINISSAGE

### 23 décembre 2018, 17h – 19h

Projection du film de Yohei Yamakado *La lyre à jamais illustra le taudis*

Performance sonore de Valentin Gabelier

Performance sonore de Kazumichi Komatsu, artiste invité